

# 教 師 ノ ー ト

|                               |   |
|-------------------------------|---|
| 日付                            | 2014年 3月16日   |
| 単元                            | ルカの福音書  |
| テーマ                           | 神の愛   |
| タイトル                          | 放蕩息子  |
| テキスト                          | ルカ15:11-24  |
| 参照箇所                          | 暗唱聖句(教会で使用している聖書訳を記入して下さい)<br>ルカ15:18   |
| AG 日曜学校教案参照箇所 (リンクできます)       | <a href="#">幼1題2課6</a> 、 <a href="#">小下1題1課7</a> 、 <a href="#">小上3題3課5</a> 、 <a href="#">中2題3課10</a>  |
| □導入                           | 今日のお話しは、昔から「放蕩息子のたとえ」と言われてきたお話しです。イエス様のたとえ話しの中でも、とても有名なお話しの一つです。  |
| □ポイント1 ある人に二人の息子がいました(11-12節) | ある所に二人の息子を持ったお金持ちが住んでいました。お兄さんは一生懸命にいつも働いていました。でも弟は働くのがきらいで、今の生活から抜け出し、一人で自由に遊びたいと思っていました。<br>ある日のことです。弟はお父さんに言いました。「お父さん、ぼくは実は町へ行きたいんです。」お父さんは答えました「町へ行ってどうするんだ」弟は答えました。「僕は町へ行って、いままでしたいと思っていたことを、全部したいと思うんです。こんな田舎にいたって、つまらないんです」「ですから、お父さんが死んだら、将来僕がもらうはずの財産を、先にもらえませんか」とお願いしました。お父さんは息子にイロイロと話しを試みましたが、まったく聞きませんでした。弟はお金をもらって町に行く、と決心をしていたのでした。そこでお父さんは考えた結果、財産を分けてあげることにしました。  |
| □ポイント2 弟は家を出て行きました(13-19節)    | 弟は財産を分けてもらうと、何日もたたないうちに、自分の荷物をまとめて、町へと旅立ちました。町は遠いところにありました。<br>彼はやっとのことで町につきました。町は自分が考えていた以上に魅力がありました。彼は遊ぶには十分なお金を持っていたので、毎日お酒を飲んだり、ごちそうを食べたりして自由に暮らしました。お金をどんどん使うのでそのお金を目当てにたくさんの人たちがお友だちになりました。しばらくは本当に楽しい毎日でした。けれども、いつの間にかお金を使い果たしてしまいました。彼はお金がなくなると、いままで一緒に遊んでいた友達にお金を貸してくれるように頼みました。でも誰も遊びのためになんかお金を貸してはくれませんでした。今までお友だちと思っていた人たちは一人、また一人と相手にしてくれなくなりました。彼はこの遠い町でお金もなく一人ぼっちになってしまいました。<br>彼はしょうがないので仕事をすることにしました。仕事を探し始めたのですが、だれも雇ってくれません。ちょうどその頃その地方を飢饉がおそっていたので、どの家でも食べるのに大変でした。彼はやっとのことで豚を飼っている農家で仕事をさせてもらうことになりました。ユダヤ人のお金持ちのむすこにとって、これはとても大変な仕事でした。ユダヤ人は豚を『きたない・汚れている』と教えられ育ちます。ですから彼も豚には近づいたこともなければ、もちろん食べたこともありませんでした。でもそれは自分のせいでした。彼は少しの食べ物でももらうためにどんな事でもしなければならなかったのです。その上、その農家の雇い主は、十分な食べ物をくれませんでした。彼はとにかくお腹がすいていたので、豚が食べているえさまで食べたくなりました。 |

その時、はじめてこの人は自分がまちがっていた事に気がついたのです。「とにかく、お父さんの家へ帰ろう。そして僕は自分勝手な事をして罪を犯しましたとあやまろう。お父さんは僕を召使の一人にしてくれるかもしれない。それでもここで豚を飼っているよりはずっとましだ」と決心しました。

家を出る時は威張って、そして町でもぜいたくをしていたのに、帰る時はとてもみじめでした。

### □ポイント3 父親は帰ってきた弟を喜んで迎えました(20-24節)

息子はすぐに長い道のりを家に向かって出発しました。そのころ、お父さんは毎日愛する息子が帰ってくるのを待っていました。

ある日のことです。お父さんはいつものように息子が行ってしまった方を見ていました。その時です。お父さんの目に誰かがこちらに近づいて来るのが見えました。それはみすぼらしい、ボロボロの服を着た人でした。けれどもよく見ると、自分の息子と同じような歩き方をしています。本当に息でしょうか?その人は少しずつこちらに近づいて来ました。「ああ、やっぱりそうだ、私の愛する息子だ」。

お父さんはこう叫ぶと、息子を迎えに走っていきました。お父さんはボロボロの服を着た息子を抱きしめました。「我が子よ、よく帰って来てくれたなあ、お父さんは本当に嬉しいよ」と言って泣いて喜びました。お父さんはもうそれ以上何も言えませんでした。すると息子が「お父さん、僕は悪い事をしました。僕はもうあなたの息子と呼ばれる資格はありません。どうぞ召使の一人にしてください」と言いました。けれどもお父さんは召使の一人に「一番良い服を持って来なさい」「そして靴をはかせ、手には指輪をはめさせなさい」。「それから太った子牛を殺して料理しなさい」。「むすこが帰って来たことをみんなに知らせて、ごちそうをしてみんなで喜びお祝いしよう」と言いました。そしてお父さんはこの弟むすこを赦してくれたのです。

### □結論 お父さんは息子のことを愛していました

### □適用 (聞き手に最もふさわしい適用が与えられるように祈りましょう)

1. お父さんがこの息子を赦し、喜んで家に迎え入れたように、私たちも悪い事をした時に、「自分が悪かった」と気がついて、神様におわびするなら、赦して下さいましょう。
2. イエス様は今日のお話で、私たち一人一人に対する父なる神様の愛とあわれみが、どのようなものであるかを教えておられます。私たちが罪の中にある時でも、自分の罪を認めて神様に「ごめんなさい」と悔い改めのお祈りをするならば必ず赦して下さいます。「もう遅すぎる」ということも、「もう手遅れだ」ということもありません。いまみんなの中で、自分の罪を示される人がいるならば、神様に悔い改めのお祈りをしましょう。